

この手紙は、縦書きで4枚の原稿用紙の裏表にびっしりと書き込んだ7ページ建てです。手紙の筆者の御子息に当たる山田勢二様から会に提供されました。この手紙を佐藤昌男世話人が正確に活字に直してくれました。伊藤章夫が縦書きを、他の証言との関連で横書きに直しました。

戦災おぼえ書 爆撃概要

山田 忍

拝啓

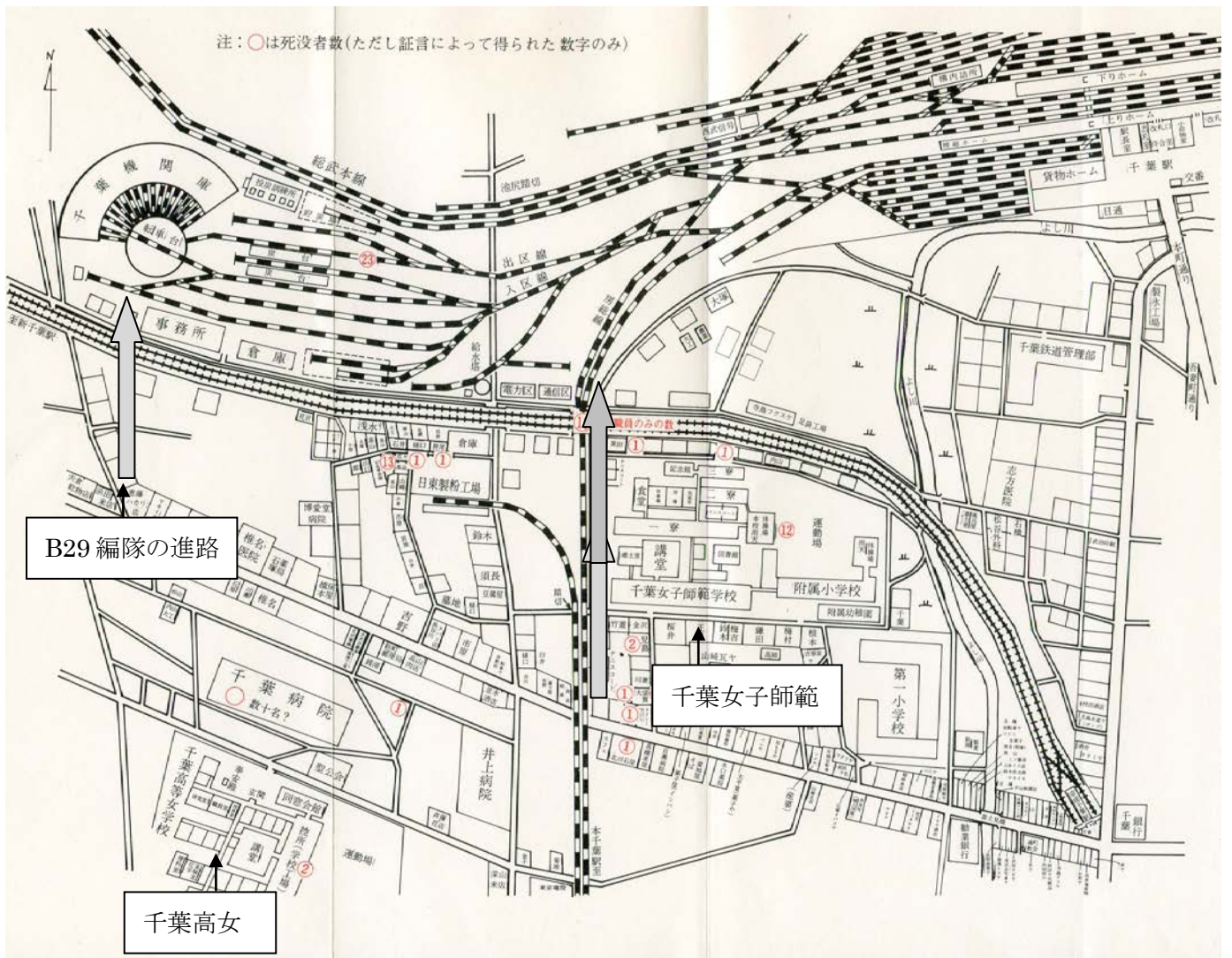
お手紙を拝見いたし、終に礼子、宗彦の事情御知りの由、誠に申訳なく断腸のおもひがします。六月十日以来幾度か死を思う程の苦悶で過ごしましたが何もかも詳しく記して許していただきませう。第一に私も勢二もかたわにならず最近医者を離れる事ができました。又千葉再度の大空襲直前に無事に退院して八街へ帰りましたので再び命拾ひいたしました。思えば六月十日は日曜日なれど私は学校へ出る。警戒が入ってからも気が落ちつかず、子供達も幾かゆっくりねかせた為に空襲になった時は丁度子供達の食事が



が終った時で（午前八時頃）情報と同時に空をみましたら敵機らしいので〇しき直ちに防空壕へ入れようとしてかけ上がり未だ子供達の側にゆかぬ間に異様な圧迫をうけて前にのめり気を失ったまま、その後気が付いた時は家をすっかりかぶってゐてはい出した時ははじめて爆だんでやられた事に気がつき夢中で隣家オギスの主人に声をかけ礼子達がかたまつてゐた八畳の入り口と思われる場所の柱その他をとり

のぞくと礼子のむざんな姿を見つけ出し、更にその下にみた赤ん坊が急に泣き声をあげたので救い出し、宗彦は見当たらず、女中は息があったけれど、ひどくやられて間もなく死去、あたり一面家なく、火事二ヶに所あり、○に赤ん坊をおんぶしてフミ切をこえて弁天町の入り口まで行きたほれました。地獄の中にある気持ちで、生きた心持はありませんでしたが、やっと警防団にたのみ、鈴木隆氏が近くへ引こしてゐるのに気がつき連絡を取って貰ひにたのみ、やがてたんかのにせられ千葉神社横の和田病院に運ばれ、ずっと七月二日迄治療を受けました。爆弾は直撃に近く八畳前（西側）の畑に二百五十キロ、裏の風呂場の後ろあたり一ヶと両方から受け、音も聞こえず、防空壕へは早く入って居れば、けが位ですんだかも知れなかったのが、朝の忙しさと情報も同時で待避の信号もなく不意打にて今だに残念とも申し訳ないとも思われます。ただ当日私が学校へ出かけてやうとして思いとどまって子供達を壕に入れてからとかけこんだ為に奇跡的に一命をとりとめました。女学校へ行く道は全部数十個の爆弾でやられてしまひ学校も六個、おそらく外へ一步出て居れば肉は散り行方不明になり、家の方も全滅で勢二もたすからなかったと思われます。それほど間に合わず、子供達の食事の時何か不安を感じましたが一瞬時に即死とは、神ならぬ身の思ふ事もできず、しきりに急かせて早く防空壕へと声をかけながら家の下じきになりました。防空壕も至近弾の為上も落ち横もはみ出し中のセトモノ、ガラスは粉みぢんになり着物も少しまるい穴があいたりしてゐたさうです。さてけがは数か所でしたがレントゲンの結果手術した場所は背中（ワキ腹）、左脚部、右足

の小指でした。ワキ腹は肋骨が少しソゲたが骨は〇じいた程度、左脚一部は動脈の手前でそれ、小指はつめと骨がとんで肉が半分残っていたみはげしく、勢二の方は



左腿か肉がとんねるの様に爆風でとられ骨にさはりなく手術せずもり上がり、只今二人ともどうやら動けるまでになりました。

礼子（足）、宗彦（手）、女中（腹部）の亡がらは直ぐ学校の方で一切世話してく

れ、学校の講堂でお通夜、翌十一日は火葬してくれました。母は十日の夜病院に来てくれました。母のなげきは格別で本当にすまなく思ひました。当日発表された死者は五百名ほどですが、その他未発表のもの二百名（駅など）傷者も頗る多く、私の隣組で家族全員又隣のオギス氏（石毛貞夫氏）のみ、長谷川組長さん四人全滅、裏の宍倉三人即死で、子供一人残り、山崎、裏の石毛、その他は二人又は三人位づつ、尚郵便局と肉屋さんは家もたすかり、いつものお風呂や一家五人全滅、花屋さんの家も直げき、奥さん、女中さん即死。千葉病院全滅。学校では生徒二人即死、二人重傷、次の七月七日は未明の空襲では私たちは危うくたすかりました。七月一日やっと足が動けた所へ佐々木（母の姉？）から見舞に来て退院という事ことにその日にきまり、母に迎えに来て貰って七月二日は身体だけ引き上げました。六日の晩に千葉は殆ど全滅、思ったよりもずっと早く、沼田校長も焼夷弾の直げきにて即死されました。

爆だんでぼろぼろになった衣類など女学校につけたものもすっかり焼失しました。学校もきれいになくなり、残ってゐるのは県庁、けいさつ、市役所付近、長洲、登戸、大学の新館、刑務所、そんなもので、私はその後岡村さんの治療を受け、〇〇〇つり、〇二十六日に和田病院の移転先へ検査にゆき、千葉の廃きよをみてきました。学校の方はもう少し休まして貰う事にしてゐます。

さて、礼子宗彦の葬儀は内々で七月十一日にすませ、私はまだ足が悪かったので母と志ン子に東金へ行って貰いました。八街（七月二日の夕）かへって、三、四、

五と三日つづいて小型機来襲、その度に壕ですごし、十日は艦上機終日、その時二、三回小型、夜間は稀に空襲も警戒もない夜もありますが、幾度か頭上を通る空襲で充分用心して過ごしてゐまして、只今新たに壕をほり増してしてゐます。

何故早く八街へ引き上げなかったか？。これは母にも言われましたが、〇〇場があつて三月に焼夷だんがおちたりしてゐたので決心がつかかなかつたのと、子供たちが冬以来病気でやっとなりぬけてきました。勢二は中耳炎を三回、宗彦はヂフテリアで一ヶ月、礼子は扁桃腺、家族全部はやり目にて、私も一月以来満足な動が出来ない位医者通ひをし、五月からは学校の増産開墾〇〇結構忙しくすごし、その中に五月二五日に横浜大空襲があつてから、千葉へも近いと感づきましたが、六月九日まで開墾でいそがしく、まさか十日にはじめての空襲でこんな目に逢ふとは思はれませんでした。銃後の守る事が出来ず毎日毎日申訳なさにいっそあの時子供達と一緒に即死してしまつてゐたらと思わぬ日とてはありません。その反面、二人だけでも生き残つてまじだつたかなどと考へます。そして、この不幸が知られる事の恐ろしさ、ただこの打ちのめされた心身の中に勢二を守りせめてものお詫びにしたいと、そんな気持ちですごしてゐます。母は志んちゃんをよく面どう見てくれます。気持ちも大分平静に帰ってきますが、二人の子供を思うと気が狂ひさうです。母は今日千葉市役所（所用を色々手続き等）で出かけました。

何事も運命とあきらめご寛容の御言葉をまっつて、はげしい空爆の中に処してゆきたいと思ひます。何卒お許しく下さいませ。中村八重子氏を通して駒中へ報らせ、鈴

おゆ

前島用箋

作事書お見いたし 後に礼子字序のつづき傳り知りの由 滅又申沃なく断陰
 のおとしがしきなり 六月十日の末 弟が友が死を思ひ程々苦悶を過しきなが
 けし程に洋しく記して許しといちよきませう 中一に私し魂二もかたわにな
 らずと申す 匠師を頼れりしかが出来しは 又千を子用及の大意を記す直前
 無記の医院にて八割へ仰りすしをいひ 再び命拾ひしにしりしなが、
 息の立りしは昨日の日の際をそれと 初は尋ねあはるるが 救ふ病の入りていつと
 気がたつたがなり 子海運も笑ふゆくり 初は世を為しに 務めは
 子海運の命よりかぬ こそけい^{（午家ハ時迄）}て情報と合符の空をみすちり 敵味り、
 救ふま 直つての防衛を隊へ入れよと一し かな上り 未知子海運の 例の中
 かな問の事存るに 追をうけしめはのあり 氣を失つたます、
 つらおは家をすすかり かなつておてはいあしたははけいして 爆ちてやら
 れたよん 気がつき 夢中で 病室のまへに 帯を切り 礼子書か かなま

No.

1.

木教頭が和田病院へ見舞いに来てくれ、続いて松本洪先生がきてくれ、加藤虎之亮先生は千葉退院日千葉へゆくその足で、又八街へと見舞いに来てくれました。

病院、学校、生徒父兄随分お世話になり、その時世話して下さった方も、今度死なれた方がたくさんあります。(今度約五千人ほどぎせいが出たとか)、銚子も全滅す〇そめ野のおばさんも、きのみでみえました。川上さんからも見舞いを受けました。四島の様相も一日一日激化してゆくとか、然し私も元気を出してあくまでも戦ひぬく決心であります。母子とも不思議な生命とも他人から言われるほどですから、あのとき死んだと思って十分自重して過ごさねばならないと思ひます。上海の空襲の事も気にかかります。何卒ご無事で。七月二十六日 勝美様 しのぶ



解説

この手紙は、2015年に山田勢二氏と言われる方で、この手紙に登場される空襲生存者の方から故ご母堂山田忍様が6月10日の千葉空襲で2人の子供を失い悲しみの中にありながら、なお空襲とたたかい続けていた時、中国におられたご夫君山田勝美様にあてた切迫した内容の手紙です。とても貴重な資料です。山田様の住居や被災場所は、千葉市新町の千葉高女官舎となっています。

手紙はその封筒の表に「戦災おぼえ書」「爆撃概要」と書かれています。この封筒は薄くて粗悪な紙でできています。その左下に「此の税金が御国の力 するな滞納 忘るな期日 千葉県」と印刷されています。

この千葉市空襲で千葉高女教諭の山田忍様家族が被災したことについて、当時の千葉高等女学校の同僚の教員であった故竹下定蔵氏は、「千葉市空襲の記録」（135頁）で次のように触れています。

（前略）「山田先生の場合は、夫君へ山田勝美氏、現上智太名誉教授）が応召中で、末の幼児を抱いて防空壕に入る瞬間爆撃され、その爆風で二人とも負傷された。逃げ遅れた長男と二男の方、それにお手伝いさん一人は、家屋の下敷きになって無惨にも圧死であった。二男の方の千切れた可愛らしい足首が人々の注目を惹き、何とも哀れをさそった。山田先生親子は和田病院に入院し治療をうけた。亡くなった三人の遺骸は、本校の同窓会館に安置した。（中略）千葉病院の患者には他県の方も相当入院していて、遺骸の引取り人がいないので、公共建物である千葉高女の同窓会

館が臨時の遺体収容所に提供された。この狭い同窓会館の一階（専攻科が授業に使用していた）には、引取り人のない十六名の遺体と、山田先生関係の三人の遺体、計十九名が安置された。」（後略）

結局、この手紙によるとお亡くなりになった方は、約 25 人で内訳は次のとおりです。山田家の 3 人のお名前等は、千葉市空襲犠牲者名簿や亥鼻公園の千葉市空襲犠牲者刻銘式平和祈念碑に記録されています。

山田礼子 10 歳

山田宗彦 4 歳

山田家女中くに 26 歳

長谷川組長さん四人全滅

宍倉（高女官舎の裏）三人即死

風呂屋家五人全滅

花屋の主婦と女中

山崎二人又は三人位ずつ？

裏の石毛二人又は三人位ずつ？

女学校生徒二人即死

証言年月日：2015 年 8 月 26 日

提供者 山田勢二：〒275-0026 習志野市谷津 5-31-30

聞き取り者 伊藤章夫：〒260-0844 千葉市中央区千葉寺町 149-2

千葉市空襲と戦争を語る会事務局